

翻刻 塩原静 『犬養木堂先生』・『犬養千代子刀自』

植 村 和 秀

〔解題〕本稿は、塩原静稿『人物三面鏡』の一部を翻刻したものである。塩原静（しおばら・しづか）は、明治三十二年（一八九九年）に横浜の貿易商の家庭に生まれた。母方は京都の出身である。長じて哲学や文学、政治に強い関心を抱くようになり、やがて女性の政治運動に身を投じることとなる。大正十三年に入会した婦人参政権獲得期成同盟では、議会運動部の若き委員長として、大正十五年から五年間にわたり、その抜群の行動力を発揮して活躍した。同盟退会後は、社会人としての自立を目指し明治大学に入学。法律を学ぶ一方で、犬養毅夫人千代子を会長に、生涯の盟友となる鳩山薫とともに、政友会所属議員の夫人たちを結集して清和会を創設する。昭和八年に明治大学専門部法科を卒業後、昭和十四年には東京地方裁判所人事調停委員の任命を受け、昭和三十三年には日本調停協会連合会理事に就任して、女性の社会的自立を実践した。他方、鳩山薫が会長を引き継いだ清和会においては、約四十年間にわたって常任幹事を務め、保守系の有力な女性たちのネットワークを支え続けた。昭和六十三年（一九八八年）に逝去。塩原紫江（しえ）は雅号である。

翻刻にあたっては、表紙に「人物三面鏡 副本 犬養木堂先生（ア）犬養千代子刀自（ア）」と記載された自筆ノートと、清書された四百字詰め原稿用紙とを比較検討し、本文を確定した。これらとともに、塩原静ご令孫の卯月阿子様ご所蔵になるものである。その際、表記の一部を現代風に修正し、明らかな誤記を訂正するとともに、翻刻者による補足

人物三面鏡（一）

塩原 紫江

犬養木堂先生

1 初対面

その頃の私は、婦選獲得同盟の議会運動委員会の委員長として、参政権、公民権の獲得運動に熱中してをりました。⁽¹⁾

「婦人公民権案」を、政友会の党議にしてみらふための要務を持って、昭和四年十月二十一日（月）東京駅十二時三十六分発の汽車で、竹内茂代女史（女医）と二人、湯河原温泉の天野屋旅館にをられます、政友会総裁、犬養毅氏を訪問に出かけました。

途中の駅から、井上孝哉代議士が同車されました。天野屋では先客が多くて、二時間ほど待ってから、星島二郎代議

部分を「」で表記した。また、翻刻者による註を付している。なお、原稿用紙には印刷用の指示が朱書されており、雑誌に連載されている可能性は高いが、発表場所は不明である。発表時期は、本文中の記述より推定するに、昭和四十年代後半であろう。

何よりもまず、本史料の翻刻にご快諾を頂いた如月阿子様から感謝申し上げます。また、犬養毅について懇切なご教示を賜った犬養木堂記念館、とりわけ、学芸員の石川由希様に記して感謝申し上げます。なお、翻刻に際しての文責は、すべて翻刻者の植村にある。

士の紹介状を差し出して、やっとお室に通されました。

犬養総裁は、信州富士見の山荘で転ばれて骨折後の温泉治療のために御滞在中なのです。マッサージをなされる臥床中の枕辺近くに座りました。

婦人公民権に対する、四千万女性の要望と、婦人界全般の現状について、初対面の私が臆することなく、二時間あまり熱心に陳情をいたしました。マッサージ師はいつのまにか退席して、枕辺には令息の健氏お一人だけでありました。

かねてから、婦選の支持者であられると聞いてをりました犬養総裁は、婦人の地位の向上、婦人の政治的進出への深い理解を持たれてをられるお気持を、推察することが出来まして、私はとても嬉しかったです。

六時に天野屋を辞去しました私は、湯河原町で写真館を営む竹内女史の令弟、井出氏のお宅にゆき、夜食の馳走になり、八時の汽車で帰途につきました。

その車中で、私は尊敬する犬養先生に、御拝眉を得、婦選に関する所信を聞いていただいた嬉しさの興奮がさめませんでした。そして「政界の元老であり、政友会の総裁である犬養先生が、婦人たちに深い理解を持たれてをられるのに、なぜ、犬養夫人を中心とした夫人達の結束がないのだろうか」といふ疑問を持ちました。この疑問は、そのとき私の胸底深く小さな灯として残ったのでした。

十一月二日（土）一時に日比谷公会堂に於て、朝日新聞社主催の民衆講座で、政友会総裁として犬養先生の講演に、四千人の人々は「犬養万歳」を叫ぶ盛会でした。

「選挙法改正のときは、女子公民権の実現と、参政権まで云々」と言及されましたことは、婦人の聴衆たちには力強くまた嬉しい事でした。

湯河原まで行って陳情した結果は、「婦人公民権」は犬養総裁の御助言と、政務調査会長山崎達之輔代議士その他の

御尽力に依って、政友会は民政党に先んじて「党議」として、可決されたのでした。

十二月十三日（金）午前十一時、自動車三台に分乗して、四谷南町の犬養総裁の私邸に左記の人々を私は案内して行きました。

婦選獲得同盟役員：久布白落実、市川房枝、金子しげり、坂本眞琴、竹内茂代。

地方支部代表：金沢市の駒井、米山、長野市の赤羽根、鈴木、小笠原、名古屋市の小尾、堀場、萩原の各氏でした。

応接室で犬養総裁、令息健氏、紹介役の星島代議士。面接は三十分ほどでありました。そのとき電通の写真班がきて写してくれました。この写真は各紙の夕刊と、銀座鳩居堂の飾窓に出されました。

この日の午後三時すぎには、犬養邸訪問の十三氏と共に、政友会本部にゆき、政調会室で幹事長の森恪氏、山崎政調会長、山口義一、今井健彦、田子一民、松村光三、加藤鏝五郎の各代議士と面談をしました。

そのとき、森幹事長は、「貴女方は、政友会にも民政党にも行って、同じことを頼むから駄目だ。政友会にぞくしてくれるのなら、当方でも力の入れようもあるがネ」と露骨な言葉を聞かされました。この森恪氏の言葉が、私には何かチラリと暗示めいて印象的でありました。

昭和五年四月二十七日（日）朝九時半に、犬養邸にゆき健氏に面会しますと、「何年にも一度といふ休月の議会開院につき、政友会総裁として、議会の中座は出来ぬと思ふ。安藤正純代議士を代読者とするかもしれない」といふことでした。

この日は日本青年館で、婦選大会があるため、十時に会場に行つてゐますと、十一時頃に犬養健氏が、わざわざ会場にこられて、「どうしても総裁の婦選大会に出席は不可能となったので、安藤代議士に代読を依頼したので、あしからず」と云はれました。萬止むなしと、御好意を謝しました。

午後一時に開会されました。来賓として、安達内相夫人、鳩山一郎夫人、吉岡彌生女史、それと各地方よりの参加者約五百名でありました。三時すぎ私は第一協議題、「婦選獲得速進の方法如何」の提案理由の説明を致しました。

2 清和会

私は、婦選獲得同盟の役員を辞任しました。そしてすぐに明大女子部法科の聴講生となりました。その挨拶状を各方面に出しますと、間もなく、水野錬太郎夫人から白金猿町の自邸に招かれました。そして慰労の食事を、御一緒に致しましたとき、「貴女を学生だけにしておくのは惜しい。かねて貴女から聞かされてゐたことを、具体的に進めてはどうなの、それには鳩山夫人とじっくり相談されては」と申されました。それは、田中義一内閣時代から、内相水野錬太郎夫人や内閣書記官長鳩山一郎夫人には、議会運動の委員長として、度々陳情にもゆき、婦選問題に深い理解を持たれてをられるお二人に、特にお親しくさせていたをりました。「からなのです」。

それに私の父は北海道函館で和洋酒問屋を手広くしてをりましたとき、政友会の内山太古代議士を支持して資金面を持つほどで、父は政友会函館支部の看板をかけてをりましたから、私までが政友会には、特に親しみを持っていました。

「婦人に深い理解を持たれる犬養総裁の下に、夫人たちが結束されて、今後の婦人の政治的進出…参政権、公民権獲得、にも女の立場から、働きかけるべきでありましょうし、御主人たちが婦人に理解がおりになるのに、その陰にあって夫人たちが、女の重要問題に無関心であることは、眞の政治家の夫人ではありません。結束するためには、会を創立して、その機関に依りお互に社会のことを広く見聞され、殊に婦人問題について学ぶべきであると思ひます」といふような意味のことを、水野鳩山両婦人にお目にかかる折々にお話してありました。

鳩山夫人は、田中内閣の時代に夫人たちの結束の必要を、痛感されてをられながら、その機会が得られなかった、といふこともわかりました。それで水野夫人の提案に大賛成されまして、そのため鳩山夫人と私とは度々面談しまして、具体案の研究を進めました。

水野夫人は積極的で、「犬養総裁とは面識のある貴女であっても、改めて私が、犬養夫人に御紹介しますから、進言なさったら、いかが」といふことになりました。

昭和五年十二月九日、夕方に犬養邸から、お招きの電話がありましたので、水野夫人の御紹介状を持って、参上いたしました。

奥の日本間で、千代子夫人に、初対面の御挨拶をしますと、「私は犬養の家内で」と申されたお声が印象的でありました。健夫人仲子様と三人で夜食の後、要談は五時間ほどですみ、車で送られて帰りました。

十二月十日には、水野夫人に報告をかねて参上、二時間ほど要談をいたしました。十二月十一日には、学校の帰途を犬養邸にゆきまして、犬養夫人、水野鳩山両夫人と四人で夕方五時まで相談打合せを済ませました。

十二月十二日（金）赤坂山王の星岡茶寮に於きまして、犬養総裁夫人の招宴には、前閣僚であった、中橋徳五郎、水野鍊太郎、床次竹次郎、勝田主計、山本悌二郎、三土忠造、久原房之助、川村竹治の諸夫人でありました。⁽²⁾

水野夫人より私を御紹介下さいまして、鳩山夫人は私の介添役をして下さいました。

犬養夫人は会の創立について、くわしくお話になりました。そして出席の各夫人を…欠席の前田米藏夫人も共に…会の顧問として御援助を願われました。各夫人は快よく賛成なさいまして、総裁夫人の決起を非常に賞賛されました。

十二月十四日、犬養邸で、健氏と鳩山夫人と私は、発会式について相談を致しました。その日の午後、鳩山夫人と二人で大阪ビルのレインボーにゆき岡村支配人と、十二月二十日の発会式の会場の事で交渉を致しました。

十二月十七日午後、鳩山夫人と共に犬養邸にゆき、夫人と要談をしてをりますときに、犬養総裁がお室にこられました。

「立派な着物をきて、大きな菓子折を持って、互に訪問する。無駄なことだ。会を作って、かみさんたちも勉強するがいい。」⁽³⁾

「また、貴方は、かみさんって、おっしゃる、失礼ですよ。」

千代子夫人は、鳩山夫人の方へ、きまりわるそうな顔をなさいました。

「かみさんといふては、どうして悪い?。」

犬養先生は澄して云はれました。

公式の場合の犬養総裁より知りません私には、家庭内での先生に接して、なんとも深いお親しさをおぼえました。

十二月二十日午後一時、大阪ビル七階で、「清和婦人会」の発会式があげられました。茶道の「和敬清寂」の中から水野満寿子夫人が、「清和」の二字を選ばれたのであります。政友会所属貴衆両院議員夫人七十余名が出席されました。会長犬養千代子より、鳩山薫、塩原静が常任幹事として指名されました。そして私が会則の説明をしました。新聞記者たちの応対も私でした。お茶の会は五時に散会いたしました。盛大な発会式に、病臥のため健夫人の欠席はまことに残念でありました。

総裁夫人である御母堂をよく援けられた健氏御夫妻の陰の御努力を私は感謝致しました。

会長と同車して犬養邸に戻り、食堂で先生御夫妻と御一緒に夜食をいただきながら、発会式の模様を犬養先生に御報告いたしますと、ニコニコして聞いて下さいました。

昭和六年一月二十日午前十一時、丸ノ内海上ビル中央亭に於て、清和会の新年宴会がありました。特に犬養総裁も御

出席になられました。

各顧問、会員（貴衆兩院議員夫人）賛助員（会員の紹介に依る人）等々、百名近く出席で盛会でありました。宮中御歌所寄人、千葉胤明先生が「皇室の御節約の謹話」をなさいました。別室で犬養総裁御夫妻を中心に記念撮影がありました。

発会式をあげるまでの資金作りに、犬養総裁は、御染筆の大色紙を何枚も寄附して下さいましたの御援助は、まことに嬉しくありがたい事と、鳩山夫人と共に喜びました。

3 私邸：その他

(1)

お茶ノ間の片隅に、角火鉢が置かれてありまして、鉄瓶が掛けてありました。

「塩原さんは、岡山のおみの塩辛は好きかネ」と先生が、食事中におききになりました。

「あの、おみの塩辛はたべた事ありません」。

「ああ、そうか：それじゃいま、わしがおいしいたべかたを教へてあげよう」と云はれ、手をポンポンとたたかれて、お春さんをおよびになりました。

小さな鍋と、おみの入ってゐる備前焼らしい壺が、台所から持ってこられますと、食卓をはなれて先生は、角火鉢の前にゆかれました。小鍋におみの塩辛を入れて火にかけて、それに酒か、みりんかを少し入れられて、菜箸でかきまぜながら、「おみの塩辛は、そのままでもよいが、こうして鍋で炒って、あたたかにしたのを、熱い御飯にのせて喰べるのがおいしいのだよ」、とおっしゃいました。

千代子夫人は、「よけいなことをなさる」という顔付で、「なにも今夜にかぎって、あみの塩辛を、そんなことなさらなくても、他にお菜はいろいろありますのに」と云はれましたので、私は先生に申しわけないようで恐縮いたしました。

「たまにはわしも、好きなようにして、喰べたいからな」と云はれました。角火鉢の前に立膝をされ、前かがみになった後姿の先生の御様子は、政友会の総裁といふ公人のお姿からは、想像もつかない、市井の好々爺といふよりは、隠者めいた尊いお姿だと、私は一生忘れることのない強い印象でありました。

先生があたたかく、炒りつけて下さった、あみの塩辛を御飯にのせて、おいしく戴きました。そして、それを小さな器にお福分をして下さいました。

六年三月二十五日（水） 中華民国の広東から、先生の喜寿のお祝に贈られてきました赤地緞子に金箔で「寿」の大旗ともいふ「寿帖」を拝見させていただきました。

そして先生御夫妻、仲子若夫人、多田信子夫人（健氏令妹）の方々と御一緒に夜食のあと、雑談で十時すぎになり、車で送って下さいました。

また時をり、先生御夫妻、健氏御夫妻に、愛孫道子サンや康彦チャンと御一家団欒の中に入って、談笑の食卓をかこむことも、度々でありました。

「紅茶にウキスキーを入れて飲むよりは、ラム酒の方がずっとうまいのだよ」と御自身で戸棚からお出しになって、私の紅茶に入れて下さることもありまして、私はラム酒のうまさ、香りのよさをおぼへるようになりました。

(2)

そのときも、お茶ノ間でお食事を御一緒にしていたときでした。中年の玄関子が、襖の外の廊下にかしこまって、「大奥様、郵便をお出しいたしますのに、あの…切手のお金が…」とくちこもりました。

「なに?…切手のお金?…もうあれだけのお金を切手代に使っておしまいかい…まあ今月はいつもより、よけいに手紙をお出しになったんですネ」と先生の方へ云はれましたが、先生は無言で食事をつづけてをられました。

「全国からくる手紙に、いちいちわづかでもカワセを入れて御返事なさるのも、いいかげんになさいまし。無心なさる方はお一人でも、受ける方は沢山のお人です。一元にしる二円三円とわづかでも、毎月毎月二、三十円の出費は大変です。あなたはすぐ、ホロリとなさるんだから…それが向ふのつめなんですよ。」

千代子夫人は、お茶碗も箸も置かれて、キッチンと両手を膝にのせて、正面切つてきびしい眼で先生を見られました。伏眼がちに黙々と箸を動かしてをられました先生は、「まあ…いいさ」と云はれたきりでした。廊下の玄関子は、自分がひどく叱られてゐるように、深く頭をたれてゐました。重苦しい一、二分でした。

「切手代を渡してやりなさい」。

先生はピリッとしたお声を残して、二階の居間にゆかれました。

「食事中です。あとで受けにおめで」。

玄関子の方をデロリと見て云はれた夫人のお声は、尖がってゐました。

(3)

中華民国四川省から、わざわざ支那の料理人をよびよせて、四川の精進料理を賞味しますために、犬養先生が同好の

人々と会員制の「無私庵」を、上野寛永寺内の楠瀬氏宅につくられました。⁽⁴⁾

六年六月十八日、千代子夫人の御招待で、左記の方々と無私庵にゆきました。四川省から持参の材料で調理されました。まことに珍味な二十余種類の四川料理を御馳走になりました。中国料理は横浜の南京街の一流店でたべる程度のは、四川料理のもの珍しき、味のすべてが素晴らしいものでした。

秦豊助、安藤正純、砂田重政、岡田忠彦、山崎猛、植原悦二郎、秋田清、坂井大輔の各夫人と。⁽⁵⁾

八月四日、広東政府の陳友仁氏御一行が犬養邸に来訪、玄関にお迎へ致しました。

十月二十三日、先生御夫妻、健氏、鳩山夫人、多田夫人、川島夫人（先生の令孫で芳沢大使令嬢）と共に無私庵で、四川の精進料理をいただきました。鳩山夫人ははじめてのことで、とても喜ばれました。六月の時の品々とまったく別の献立で、日本では賞味できません中国独特の美味でした。二度までも私は御馳走にあづかり、とても嬉しくありがたいことでありました。

十一月二十日（金）内幸町の大阪ビル七階で清和会が「満洲事変と婦人の覚悟」について、麻布連隊司令官、中村馨大佐の三時間にわたる講演終了後「満洲派遣将士慰問」につきまして、緊急相談会を致しまして、左記のことをきめました。

一、慰問袋一個（金一円の割にて、現金を以って本会にまかせること）

二、会員は五個以上を責任とすること

三、顧問、賛助員は各自の個数は自由のこと。

四、送金締切は十一月三十日。

十一月二十九日、新宿二幸商会、四階にて、慰問袋調製には、会長はじめ顧問・会員の皆様エプロン姿も甲斐々々しく慰問袋と集められた袋の中に、左記の品々を詰込みました。

「二寸角絹製の国旗。女優のプロマイド。煙草キャラメル、のしか羊羹焼海苔砂糖付落花生酢昆布氷砂糖、ドロップ黒飴、慰問袋寄贈者の住所氏名札一枚」

陸軍将士に対する慰問袋二千個は、五十個詰の箱四十個、それを高く積み重ね、その前で参加者二十九名はエプロン姿のまま記念撮影をしました。

十二月四日、慰問金の受付締切をしまして、犬養邸で計算、総額金四千九百十九円也。

十二月八日、新宿二幸商会で慰問袋調製、海軍（北支警備将士）あて二千個の袋の中は、陸軍と同一品でありました。海軍のときは、特に犬養総裁御染筆になる「感謝」と染められました袋を使用。参加者三十三名記念写真。

十二月十二日（土）陸海両軍に四千個の慰問袋を発送しました。戦死者に弔意金を送ることになり、その事務のため十日十一日と犬養邸に行つてをりました。

政局のあわただしい動きが察しられ、ことに十一日夜よりは、犬養内閣出現の空気が濃くなりました。それで十二日は朝から犬養邸にゆきまして、男二人に指図しまして、百四十八名に弔意金を、書留便で発信させました。

4 色紙（硯、扇子）

公人としては精悍な木堂先生が、私邸では別人のように、なごやかな老紳士であられました。南に大きく開けたお庭で、愛好のバラの手入れをなさつてをられます後姿を、窓越しに度々お見かけしました。

「毎日バラの虫を取るのが一役でな」とおっしゃるときの好々爺然としたお姿、憲政の神様と云はれ、時の権力者たちを震駭させるお方とは思えませんほど、私生活の先生は、親しみ深いお方でありました。

ある夜お茶の間で、御夫妻とお食事をしてゐましたとき、玄関子が廊下の襖を開けて、「代議士の本田様からお電話で、お願いしてあります色紙は、まだでございましょうか、と申されますが」とおづおづ小さな声で申しますと、「なに？」と云はれたお声が、ピンとひびいて、私はハツとしてお顔を見ました。

「おれは書家じゃない…そう云つてをけ」。

鋭いお声でした。

「ハア…」と頭をさげた玄関子は、すぐには襖をしめませんでした。

「食事中ですからネ…襖を閉めて…」。

千代子夫人に云はれて、当惑顔の玄関子は「ハア」と一礼して去りました。

なごやかな食卓が白けてしまい、不きげんのまま先生は二階のお居間にゆかれました。

それから一週間ほどしたある日、千代子夫人と私がそのお居間に居りましたとき、先生が一枚の色紙をさげて、入ってこられますと、「塩原さん、これをあげる」と申されて、びっくり致しました。

「ありがとうございます。あの大先生…色紙の文字がよめませんし、その意味もわかりませんので」。

「そうかそうか、意味はな…光る珠は水の底にあつても輝くといふことで、人は自分の才能をひけらかしてはいけません。せっかくの才能が値打をなくしてしまふのだ。つつましくしてをっても、値打は自然とでるものだ」。

大色紙の文字を見ながら、先生のお言葉を、私は嬉しくありがたく、なみだ涙ぐみそうになるのを耐へてをりました。処世訓として私には大切な大色紙をかけるために、さっそく雲版を買ってきました。

それからしばらくたった十二月のある日、千代子夫人と御一緒に居りますところへ、先生がお室の入口で立ったまま、「塩原さん」とおよびになられ、大色紙らしい紙包を、無言で私に手渡されまして、すぐ行ってしまわれましたので、私はお礼を申し上げることができませんでした。

思いがけなく再度、色紙をいただきとても嬉しくて、千代子夫人に、「ありがとうございます」と紙包を前に、おじぎをしますと、「いつ…あるじにおたのみしたの」と千代子夫人の怒っているようなお声に、私はびっくりして顔をあげました。

「いいえ、私…大先生におたのみしません」と早口に申しますと、「へえ？…おたのみしないのにネ…よくまあ」と、千代子夫人の眼尻が少しつり上って、ツンと、とり澄まされた横顔は、意地悪い皮肉な一面を見せられたようで、私は悲しくなりました。紙包を開けて、千代子夫人にお見せする気にもなれず、白けたその場に居たたまれなくて、「今日これで失礼いたします」と御挨拶しましても、千代子夫人は知らん顔をしてをられました。お居間を出てきますと、廊下の角で、お菓子をはこんできました仲働のお春さんが、「アラ、もうおかへりで」とびっくりしました。

「ちよっとネ」と目顔でうなづきますと、お春さんは、わかったように、うなづいてくれました。

「総裁の御奥様」とあがめられ、令夫人たちの世辞追従にかこまれてをられる千代子夫人の生活を見聞している私です。千代子夫人の居間の箆笥の引出しの中には、先生御染筆の大色紙が沢山入ってをるのを見ました。

「まあ、家宝になさりたいって…あるじの書いたものが、そんなにお望みなら、まあ色紙でも差し上げましょう」。

千代子夫人は、ごきげんで、箆笥の引出しから、朱書「喜」の字の大色紙を出されて、それを応接間できりまき連の夫

人たちに、お上げになるのを度々見てゐました。

はじめて色紙の沢山入ってゐます引出しを見ましたときは、びっくりしました。千代子夫人から一枚ぐらいは私に下さるかしたら、と思つたこともありました。色紙をいただいた夫人たちは、そのお礼として高価な贈物をなさいますのを見てをります私は、自分からは「いただきます」などと、決して云ふまいと思つてをりました。私のこの気持を見ぬかれてをられましたのか、千代子夫人の前で、二度までも色紙を私に、先生がお手渡し下さつたことの皮肉さを思いました。千代子夫人に意地悪い眼で見られました紙包の中の大色紙の行書の文字の読も意味もわかりませんでした。その後、そのことを先生におたづねしたくても、何か具合わるくできませんでした。この二度目の大色紙のことで、千代子夫人との間に気まづい思いをさせられましたことは、母にも親しい鳩山夫人にも誰にも話しませんでした。

会の用事で、一週間後に犬養邸にゆきますと、千代子夫人は忘れたようにサラリとした態度をされてをられました。昭和六年一月十二日（月）犬養邸にゆき、会長（千代子夫人）の室で、清和会の会務を手伝つて下さる先生の甥、小川昇氏と話してをりますところへ、来訪されました砂田重政夫人星島二郎夫人と御一緒に、二階の先生のお居間にゆきまして、新年の御挨拶を申し上げました。そのとき、思いがけなく先生は、三人に「書初だ」と申されまして、朱書の大色紙を下さいました。私は朱書の色紙を戴けるとは思つていませんでしたから、とても嬉しかったです。私ひとりか頂戴しましたら、また千代子夫人に嫌味を云はれるかも、わかりませんが、砂田星島の両婦人と一緒のことでしたから、千代子夫人の居間に戻りまして、両夫人と共にお礼を申しますと、「まあまあ、それはよかつたこと」と申されましたので、私はホッと致しました。

× × ×

六年二月節分すぎのあまり寒くない日の午後、学校のかへり信濃町駅で下車、近くの犬養邸にゆきました。駅のホームから高い石垣と植木や邸の二階が見上げられます。

御夫妻お揃ひのところで、茶菓をいただきました。先生はくつろがれてをられました。

「法律の勉強は面白いかな」。

先生はやさしく申されました。

「ハイ、はじめは二時間の筆記に馴れませんでした、今は少しづつわかってきました。でも法律はむづかしいものだと思います」。

「塩原さんは学生らしく白襟で袴姿が、いちばん似合ふわね」と、千代子夫人はごきげんの御様子でした。

「苦学しても学生生活はたのしいものさ、女子にも法律を学ばせる時世がやっときたのは、よいことだ、あと何年通学するのかな」。

「去年十月に聴講生として入りましたので」。

「それじゃ好きな科目だけの聴講なのか」。

「いいえ、私は出来るだけ全科目に出席してをりましたためか、学長の松本重敏先生が、期末試験をうけて成績がよければ、二年に進級させて下さると、申されました」。

「ほう、それはいい、どうせ勉強するのならば、聴講生でなく、卒業することだ」。

「それで塩原さんは、その試験の準備もあって、三月中頃まではきなまらないそうです」。

「ハイ御無沙汰になりますが」。

それではこれだと、私が辞去しかけると、「塩原さん、ちょっと、待ちなさい」と先生は二階にゆかれ、すぐ戻られ

ると、「さあ、これは家に帰ってから開けなさい」。

先生はお弁当ぐらいの新聞紙包を、私の前に置かれました。

手に取るうとした私は、「あら重い」と思はづ云いますと、「重いのは小判が入ってるかもしれない」と、先生は真面目なお顔で云はれました。

「あら大変、小判ですか」。

びっくりした私の顔を見られて、「ウフフフ」と、先生は笑はれ、「貴女は無邪気だね」と、夫人も笑はれました。御夫妻の笑声をはじめてお聞きした私は、キョトンとしてしまい、何がお可笑しいのかわからぬまゝに、ズシリと重い新聞紙包を戴いて帰宅しました。

私から新聞紙包を受取った母は、「この重みは硯ですよ」と云ふのに、私はびっくりしました。硯の重さと気付かない私のうかつさも、先生が私に硯を下さるなどとは、思ひもよらぬことでしたから。木堂先生が、硯に深い造詣をお持ちのことは、聞いてをりました。その先生から頂戴した硯は、底が深く斜になってゐて、四隅の角がピタリと、はめ込みになる底板と、かぶせ蓋は、厚い紫檀でした。それと桐箱に入った「墨」に「木堂散人寶用、海東第一椽」裏面には「梅仙老人監造、隠刀人刻」と記されてありました。⁽⁹⁾

硯と墨の他に、私を驚かせ喜ばせたお品は、細長い模様入りの黄色い紙箱の表に貼られた赤紙には、「塩原女士莞留 木翁呈」と記されてあり、白檀の扇子が入ってをりました。白檀には「吉羊、延年」と彫ってあり、扇面には朱書で、右からの横書で、「本無 塵土 氣 自在水 雲郷 楚々 浄如 拭亭 亭生 妙香」たて書「是詠蓮華詩畧呈」

塩原女士 木堂老人 時年七十七

毅

木翁⁽¹⁰⁾

「御立派なお硯や、お名入りのお墨、その上、朱書の白檀のお扇子を頂戴したお前さんは果報者ですよ。木堂先生の

御好意を忘れては罰があたります。このお扇子は家宝として大切にしなければ」と、母は感激の涙をうかべてゐました。「塩原女士」と書かれた扇子の箱を、硯と共に無雑作に新聞紙包になさったのは、千代子夫人には内証のことではないかと思いました。何ごとにも形式張る千代子夫人が、承知のお扇子ならば、白紙に水引をかけて、大げさに私にお渡しになるはずだと、母に云いますと「さうだろウネ」とうなづいてをりました。

三月の試験も無事に済ませ、二年に進級できそうだと思ふ、軽い気持ちで久びさに、犬養邸にゆきました。先生は御不在でした。

「新聞紙の中で、小判が硯に化けてをりました。ありがとうございました」と千代子夫人に申しますと、「おや、小判が硯に化けましたか」と、いかにも面白そうにニコニコされました。それきり、扇子のことは何も申されませんが、試験のことを、あれこれ話題にされました。私が思ったように、お扇子は先生だけの御好意だと、シミジミありがたく思いました。

四十余年になります現在でも、大切に保存してあります。白檀のお扇子は、箱からとり出しますと、好い香りが致します。

5 帯留の金具

三越本店の別室を借り、清和会の計画部会に、犬養会長、鳩山塩原両常任幹事と、部会の夫人たちが集まりました。例会に講演を依頼する講師の選択その他の相談を済ませまして、三時頃には散会になりました。三越から私は会長の車に同乗しました。特にお誘ひをうけられた四名の夫人たちは、それぞれ自用車で四谷の犬養邸に向ひました。

千代子夫人は会合の後、一人だけで邸に戻らない方でした。私だけお供するのは勿論のことですが、用事はなくとも

誰かれを誘はれて邸におつれするのがお好きでありました。「テキパキと清和会のこととは、よくやって下さるが、奥様たちとの、おつき合いいには、まだ世馴なさらないのでネ：勉強の時間も惜しいでしょうが：世間のこともいろいろ知らなくてはネ。塩原さんは法律学校の書生サンだから、まだまだ角かどのとれないのが、珠にキズですよ」と、鳩山夫人と三人のとき会長から云はれました。その言葉を母に聞かせましたら、「おっしゃるとおりだよ。目の前で云って下さるのが、本当の御親切といふもの。法律の勉強も大切だが、世間学は学校のように、三年で卒業といふ、単純なものじゃないからネ。あんたから見れば、くだらないおしゃべりと思ふことが、決して無駄なおしゃべりでないものが、含まれてるんだよ。時間を上手にくりまわして、お誘ひをうけたら、いつでもお相手をするようになさい。お前さんが年を重ねてゆけばわかるんだから」。

シミジミと母にさとされてからは、おしゃべり二次会を馬鹿にしなくなりました。

三越から犬養邸にこられました鳩山秋田砂田岡田の夫人たちは、千代子夫人の居間で、おしゃべり二次会がはづんでいましたとき、フラーリと犬養総裁が入ってこられました¹¹。

「京都へ行って、掘出し物をした」と千代子夫人の前に、横座りをなさいました。二寸ほどの細長い物が薄い長崎紙に、一つづつ包んでありました。それをゆっくりりほどかれながら、列べられました。それは「小柄こづかの鞞さや」で素晴らしい見事なお品だと、私は眺めました。

「ちょうど五本ある。どれでも好きなのを」と先生が申されたので、びっくりしました。

「まあ、こんな結構なお品を」。

「よくこれだけお集めになりましたこと」。

「こんなお美事なお品は、やはり京都でないとございませんでしょうネ」。

「帯留の金具にさせていただけると、どれを戴いてよろしいのか迷ひますわ」。

四人の夫人たちは大喜びで、それぞれ模様のちがふ五本を、別々に手に取ってながめたり、自分の帯のところにあててみたりして、たのしそうでした。私はなんと申し上げてよろしいのか、うまく言葉になりませんまま、手にも取らず黙って眺めてをりました。年長の夫人たちより先に、手に取ってはいけない、残ったお品を戴ければ、それでよいのだと思つてをりました。

「塩原さんは出世前だから龍がよいだろう」と先生はおっしゃって、龍の柄を取られると、近くに居ました私に差出して下さいました。「ありがたうございます」と左手にうけて、右手をついておじぎをしました。

「塩原さんには龍がよいでしょう」。

千代子夫人がニコニコして云はれましたので、私はとても嬉しくなりました。

鳩山夫人の柄は梅の枝でありました。

× × ×

「塩原さんの宗旨？」と、先生がおたづねになりましたので、「日蓮宗でございます」と申し上げましたことさへ忘れてしまいました頃、千代子夫人と二人だけのとき、「日蓮宗なら、これを上げよう。紐は道明に作らせた」と申されて、先生から戴きましたお品は、三寸ほどもある「小柄の鞘」に、南無妙法蓮華經とあざやかな金文字の梨地でした。白茶に金茶で下緒風さげをに打たせた紐を通して、帯留に作らせてありました。

「まあ…素晴らしい」と私は見とれてしまい、ハッと気がついてから、両手をついてお礼を申し上げました。先生は、「日蓮宗に深く帰依した武士が持つてをった物だろう」と申されると、すぐ二階にゆかれました。

「なにしろ変な物を掘出してこられるのが、あるじの道楽なのでネ」と、千代子夫人は苦笑してをられました。

二三日後、無地の衣服に改めまして、犬養邸にゆき、お茶を召し上がり、夫人の居間に見えられました先生に、改めてお礼を、母の喜びを申し上げまして、その帯留をお目にかけますと、「帯とはよく似合ふが、ハイカラさんにはどうかな」とニコニコして申されました。

× × ×

五・一五事件の直後、木堂先生の尊い形見となりました「南無妙法蓮華経」の帯留は、白茶地の紐を、黒の紐に取替えまして、七日七日の忌日には、喪服に黒の丸帯に必ずこの金具の帯留をつけて犬養邸に行つてをりました。犬養内閣の外相でありました芳沢謙吉夫人（犬養家の長女）が、「まあ、南無妙法蓮華経の帯留なんて、めづらしいわ。佛事の帯にびったりの金具じゃないの。いつ？ おじいさまからおもらいになったの」と羨望の眼で、金具を見てをられました。この帯留の金具は、夫人たちの間に知れて、佛事に集るたびに、皆さんから羨望の眼や、言葉がうるさいほどでした。

百ヶ日の法要のあとで、「塩原さん、その南無妙法蓮華経の帯留を、亡父の形見に、私にゆづって下さらない？ 他の形見と取替えて、おねがいするわ」。

芳沢夫人に、くどくねだられました。私にとっては、大切な御遺品なのです。いくら御遺族でも、この帯留ばかりは、おゆづりするわけには参りません。あしからず」と、キッパリお断りいたしました。

6 大命降下

(1)

昭和六年十二月十二日(土) 犬養邸には、政友会の党員が大勢きてをり、各新聞社が、直通電話線を、広い庭に掛けめぐらしてゐました。邸内は人ばかりが、ただ動きまはるだけの、あわただしいことでした。

西園寺公が、参内されましても、なかなか宮中からの「お召しの電話」がありません。期待の中にも、一抹の不安に人々はただウロウロするばかりの、おちつかない事でした。

西園寺公邸に招かれてゆかれました犬養総裁が、党員や新聞記者の人々の渦をかき分けるようにして、帰邸されました。無言で二階のお居間に上ってゆかれまますお顔を見上げまして、私は大丈夫といふ気がしました。

夕方いそいで自宅にかへり、清和会の会服(無地)に新調の塩瀬の丸帯(鳳凰の縫取)、それに犬養先生よりいただきました「龍」の帯留をしめて、犬養邸にゆきますと、「単独内閣だ」「いや協力内閣だ」と、渦のような男たちの声でした。

「宮中からのお召しの電話」を取り次ぎたいと、二、三人の若い代議士が、電話の前で互にゆづらないで、頑張っているのが、おかしかったのです。午後十時三十分、宮中からのお召しの電話のベルが、特別に高く鳴りひびきました。万歳々々の声の渦の中を、参内されました。そして大命を拝受されて、帰邸されましたのを、お迎へしましたとき、犬養総裁のきびしく緊張されましたお顔をお見上げして私は、喜びにゆるんでゐました自分の顔が、ピリッとひきしまるようでした。

夫人の居間に入られました新首相と、千代子夫人の真中に愛孫道子サンが、可愛い眼を輝かせて座られ、私と仲子若夫人が、新首相の左右の肩越しに、左記の夫人たちと共に、新聞社のフラッシュをあげました。

そしてシャンパンで乾盃でした。

砂田太田星島植原喜多坂井鷹居の各夫人たち（写真にある人々）同室におられましたのは、鳩山秋田松野猪野毛若宮野田鈴木滝金光清瀬土倉本田の諸夫人たちでした。⁽¹²⁾

組閣は奥二階の日本間でありました。

健氏が庭の裏木戸から、ソッと外出されますのを見たのは私だけでした。

奥二階の裏階段を、頭から毛布をかぶり、誰かわからぬようにして、ソッと厠かほに下りてこられましたのは、古島一雄氏でありました。徹夜にわたる組閣工作でありました。

(2)

十二月十三日午前八時に犬養邸にゆきました。喜びに眠れなかった人々の顔ばかりでした。午前九時の親任式に、新首相として参内されます犬養総裁を、玄関にお見送りしました。昨夜乾盃のあと、相談してありました清和会からのお祝品を買いに、秋田金光の両夫人と共に、小雪降る中を日本橋の象彦へゆきました。「黒塗、撫子なでこの貝入、喜三郎火鉢一対」を金九十円で求めました。そして火鉢の底に「御祝清和会」と朱書させることにしました。お祝品がどしどし持ち込まれます内で、国民党以来の熱心な支持者であります京橋の尾後貫、鈴木すずきの両家から、四斗樽の上に、やっとのせるほどの大きな紅白のお祝餅が、届けられ玄関に飾られました。玄関先には、四斗樽がつまれましたし、家の中には十本入りの清酒の箱や、ダース入りのビール箱、洋酒類、それに籠入紅白のブドウ酒、にんべんの鰹節は青竹の籠入や、目出度い模様の塗箱入等々、置場に困るほどでした。縮緬細工の日の出や大鯛の飾物は、まるで結納の祝品のような華やかさで、お座敷の床ノ間に列べられました。

(3)

新大臣となられた諸夫人たちが、あらたまった喜びのお顔で、お礼言上にこられました。応接間、お座敷、夫人の居間と祝客をふり分けまして、新首相夫人がそれらの室を順よくまわられる間の、つなぎの接待を致しました。次ぎから次ぎと、出さねばなりません茶菓の用意を指図するために、台所とそれらの室々との間を、往復するのに忙しく動きましました。祝客が多いために、台所はその接待の茶菓の用意で、見知らぬ四、五人の婦人が働いてゐました。調子よく茶菓がこぼれてきませんと、台所へゆき、「お居間の方へお茶、急いで下さい」と、私はツイ大きな声を出しましたら、エプロン姿の中年婦人が、「ハイ、すぐお持ちいたします」と頭を下げられました。廊下を居間の方へゆきながら、「お春さん、あの奥様はどういふ方なの、手がのろくて、イライラするわ」。

「あの奥様は前の××県知事の××様です。今度またどこかの県に復活なさりたいんでございましょう」。

お春さんは小声で云いますと、いそいで納戸の方へ行つてしまいました。

政友会の天下になれば、政友系の人々が、役職に復活すると云います。知事と云えば、一国一城の偉方と思つていました私は、「すまじきものは宮仕え」といふ言葉をかみしめました。

新首相御夫妻と共に祝膳にもつきました。そして夜まで祝客の応接に多忙でした。

× × ×

後日、お祝いのさわぎがおさまりましたから、千代子夫人御自身が指図なさいまして、清酒は出入りの酒屋に、洋酒類は明治屋に、鯉節は「にんべん」に貫目つらをはからせて引取ってもらいました。紅白のブドウ酒はダース五十円でありましたとか。紅白のリボンをさげてアケビの籠に入ったブドウ酒が、沢山地下に納められましたのは羨ましい事でした。

十二月二十日(日)たのみつけのタカラ自動車の佐野運転手にきてもらい、午後から夜八時半まで、犬養内閣に任官されました左記の清和会会員の夫人たちのお宅へ、祝詞の挨拶まわりをしました。

秦豊助(拓務大臣) 加藤久米四郎(次官) 牧野賤男(参与官) 床次竹二郎(鉄道大臣) 野田俊作(参与官) 三土忠造(通信大臣) 坂井大輔(参与官) 中橋徳五郎(内務大臣) 松野鶴平(次官) 山本悌二郎(農林大臣) 砂田重政(次官) 今井健彦(参与官) 若宮貞夫(陸軍次官) 西村茂生(参与官) 堀切善兵衛(大蔵次官)¹³ 鳩山一郎(文部大臣) 安藤正純(次官) 山下谷次(参与官) 等々。

どこのお宅にゆきましても、お祝品として、酒樽、洋酒、鯉節等々が山積してをりました。最後にゆきました鳩山邸でくつろぎ、文相御夫妻と、夜食を御一緒にいただきました。自動車で乗ったりおりたりで相当につかれました。

十二月二十二日(火)首相官邸の通用門から、はじめて日本間(首相のお住居)に行きました。首相夫人は外出されてをられました、女中頭のおテルさんの案内で、各室を見せてもらいました。首相秘書官としての健氏の官舎は、首相官邸の通用門の向側にある洋館だと聞きました。

7 縮緬の座布団

犬養内閣が誕生し、その大臣政務次官参与官の各夫人は、清和会会員として、会長の犬養首相夫人にお祝品を贈ることになりました。長年野党生活の犬養家には、客用の座布団は、銘仙や八端をよせ集めましても、三十枚とは揃っていませんでした。四谷の私邸ならばその程度でもすみますが、首相官邸の日本間は、十五帖二間十二帖二間の広さでは、お祝品は「縮緬の座布団五十枚」がふさはしく、既製品でなく、新調することに相談がまとまりました。

十二月十七日の寒い夜、銀座一丁目の越後屋に、砂田太田の両夫人と私が注文にゆきました。越後屋は山本農相夫人と親戚関係でした。生地は大巾の浜縮緬、藤紫の地色に四君子の模様、表に菊竹梅を丸形の中に配置して、裏には蘭模様は白抜きといふことでした。

「白上りでは淋しいから、少しは色を入れたら」と三人が云いましたが、番頭たちが、白上りの方が上品です、と云はれますと、そうかしらとも思ひ、専門家にまかせることにしました。

首相官邸に越後屋から届けられました縮緬の大形座布団は、十枚づつ「たとう紙」に包まれて、座敷に列べられました。

「こんな立派な座布団を作って下さるのならば、白ばかりの模様でなく、少しは色の入った方が、よかったですでしょうに、ちと淋しい」と、首相夫人のつぶやかれたのを聞きましたとき、注文に行きました私は、申訳ないように思いました。お祝ひをした夫人たちにも、お見せするために一包十枚は、たとう紙のまま、座敷の隅に置いてありました。

或る日、砂田太田の両夫人と私が居合せましたとき、山本農相夫人が訪問されまして、お祝ひの座布団を見られました。

「いくら越後屋が白上りが上品だって…淋しいじゃないの…それに五十枚の座布団を急に使ふときなんて、お通夜ぐらいだもの」と云はれまして、三人はハッと顔を見合えました。幸いその席には首相夫人はをられませんでしたが、ホッとしましたものの、何気なくお通夜に云はれましたことが、いつまでも気になりました。淋しいと云はれました白上りの模様を、首相夫人は気になさらない御様子で、喜んで使用されました。

×
×
×

五・一五事件で犬養首相は急逝されました。首相官邸のお通夜には、広い日本間の各室に敷き列べられました五十枚の大巾縮緬の座布団は、弔問の人々のあわただしさに踏み乱されてゐました。

悲しい思い出となりました首相官邸から、初七日に四谷の私邸に引上げも無事にすみました。そして三七日忌も近い或る日、突然、私宅に犬養家の使いとして、仲働のお春さんが、運転手に真新しい萌黄唐草のお風呂敷包を、持たせまして、「塩原様にお骨折りいただきました縮緬のお座布団十枚、このたびの記念にお納めねがいますように、とのことでございます」と、お春さんは深く頭をさげました。

官邸の通夜の混雑で、新品の座布団もしみが付いたり、汚れたり致しましたが、なるべくきれいなのを十枚選んで参りましたつもりでございますがと、ゆき届いたお春さんの口上でした。本宅に十八枚、御新宅（健氏）に二十枚、そして私に十枚と分けられたとのことでした。

犬養首相が、両陛下の御真影の下、床の間を背に縮緬の座布団に端座されてをられたところを「問答無用」と狙撃されたのです。白上りの四君子の模様は、犬養首相の流血が浸み、倒れてから別の一枚にもその時の血潮の跡を黒く残したまま、綿をぬいた血染の縮緬二枚は、悲しい記念として、広口の瓶に納められました。

× × ×

十三年五月十五日（月）上野寛永寺で、故犬養首相の七回忌の法要後、寛永寺の後方——道路の向側——の地藏寺で有名な浄名院に、御冥福を祈念しまして、有志夫人十九名（鳩山、松野、森、水野、三土、安藤、中島、牧野、太田、加藤、若宮、岡田、星島、砂田、野田、植原、猪野毛、箸本、塩原）が建立いたしましたお地藏様の開眼供養式には、千代子未亡人、健御夫妻、古島一雄夫人その他が参列されました。そしてそのお地藏様の台座の中に、瓶に入った血染

の縮緬の座布団地が永久に埋められました。⁽¹⁴⁾

× × ×

犬養家から贈られました縮緬の座布団は、その記念の由来を母は来客に話しますが、めったに使用しませんで、大切にしてをりました。木堂未亡人は四谷の本宅から、麻生筭町に新築された別宅に移られました。別宅では悲しい思い出になる四君子の縮緬の座布団はあまりお使ひにならぬようでした。本宅の仲子夫人は、四君子の模様がわからないほどの濃い納戸色の無地に染替へて使用されてゐました。私宅では戦時中の疎開の荷物の中に五枚だけ入れましたが、残りの五枚は九段坂上の借家と共に戦災で失ひました。疎開して五枚は無事でしたから、母は正月か特別の客の時だけ使用しました。戦後も十五年になりますと藤紫の地色もさめてきましたので、染替を母に相談しても許しませんでした。三十八年に八十八才で母も永眠しましたので、縮緬の座布団をほどこき、裏布を補充させ、蘭の模様だけを「ろうけつ」にして、地色を古代紫に濃く染替へました。思いで深い記念の座布団五枚を大切に、時おり使ってをります。

8 首相公邸 日本間

(1)

昭和七年一月九日(土) 昨八日正午頃、桜田門外で不敬大逆事件突発のため、昨夕犬養内閣は総辞職を執行されたので、お見舞をかねて朝十時に首相公邸日本間にゆきますと、首相夫人仲子若夫人鳩山夫人もをられて、御一緒に泣き出してしまいました。

宮中より帰邸されました首相より、「有難き優誼」を拝されましたことをうかがい、三夫人も共に新たな感激の涙で

ありました。そして内閣の再降下もわかりまして、鳩山夫人と同車してかへりました。

一月十一日（月）午後五時、公邸日本間で首相夫人仲子若夫人鳩山夫人と「清和会の年始会を再会するか否や」を協議しました。私は中止説、鳩山夫人は再会説、二人は互にゆづりませんでした。そこで首相秘書官の健氏の御意見をききますと、中止説であり、首相夫人も中止に賛成され、清和会の年始会は中止にきまりました。そのあと、首相としての木堂先生と御一緒に、食堂の椅子で夜食を戴きました。

二月二十一日、朝十時に鷹居文徳夫人（首相の令姪）と共に、首相官邸の向側の外相官邸にゆきまして、芳沢外相夫人（首相令嬢）と初対面の挨拶をしました。佛国大使として、永く巴里にをられた操夫人と、二十分ほど内外の情勢について、お話を致しました。

公邸日本間に戻りますと、刻々と各地より総選挙の情報が入ります。東京第二区は本郷小石川神田下谷浅草京橋日本橋で、最高点で当選されました若先生健氏と、首相御夫妻、仲子若夫人それに私も御一緒にお祝ひの食卓につきました。その席上首相に私は「比例代表制」について、御意見を聞かせていただきました。首相夫人は真剣なお顔で、「この次の選挙までには女も投票の権利を貰はなくては困ります」と云はれました。

午後には鳩山御夫妻もこられまして、各地の情況について賑やかでありました。政友会は当選者三百余名でありました。

「少し取りすぎたな」と首相はつぶやかれました。

二月二十六日（金）五寸あまりもつた雪道を自動車で公邸にゆきました。広々とした公邸の庭は、雲の白さが陽に反射して、木々の梢の美しさに見とれました。

首相夫人外相夫人と清和会のことで要談を致しました。来客が多く、夕方までその応接に忙しく、夜食は御夫妻と御

一緒でありました。食後に、首相は私に政友会の成りたちについて話して下さいました。

二月二十八日(日)正午近く、首相夫人御自身で電話をかけてこられまして、相談したいことがあるからすぐきてほしい、とのことでした。学期末試験の下調べをしなければならぬ、大事な休日に困ったとは思いましたが、すぐ車でゆきました。

鳩山砂田の両夫人もきてをられました。清和会の役員のことや、官邸で清和会会員を招待することなどの相談も、無駄なくまとまりまして、三時に帰宅しました。

三月七日より十五日まで連日試験のために登校しましたので、公邸には行きません。

三月十六日午後二時、半月ぶりで日本間にゆきました。広い庭の芝生にさす春の陽光をながめながら、首相夫人鳩山三土山本の諸夫人と共に、二十七日の招待会の相談でした。

三月二十七日朝八時に日本間に行きますと、首相夫人は結髪中でした。この日は首相夫人が会長として、清和会の諸姉を招待される園遊会でした。

首相官邸の正面玄関から、訪問着姿の夫人たちが参集されました。葉玉形のシャンデリヤが左右にズラリと下がる美しい大ホールに、赤ビロードの椅子が並び、出席会員は約三百名でありました。犬養首相も御出席下さいました。司会は塩原常任幹事、会長の挨拶は若夫人の犬養仲子が代読されました。会務報告は鳩山常任幹事。新会員(新代議士夫人たち)の名前を呼び上げました。新会員を代表して、三重県の堀川幾英夫人が謝辞をのべました。芝生の椅子に席を移して、園遊会になりました。手品、百面相その他の余興を見物したり、おでん寿司蜜豆等の屋台もありました。四時近く花曇りのうすら寒い風が出ましたので散会になりました。

四月一日(金)午後鳩山婦人と公邸にゆきました。一万二千坪の芝生の庭には、春光うららかに赤松の枝が影を写し

て、おだやかな芝生の道を散歩されます首相御夫妻につづく鳩山砂田の夫人たちと私の五人を、近藤秘書官が撮影しました。

宮崎護衛（刑事）が十六ミリの映写機をまわしました。築山の下、池の畔の芝生に卓と椅子が用意されまして、菓子や果物その他をいただきました。ことに首相愛用のコーヒークの香りが春の微風にただよび、仲子若夫人もこられまして、愛孫道子サンと康彦チャンは芝生をかけめぐってをられました。

四月二十三日（土）朝九時半に日本間にゆきまして、首相夫人や若夫人と清和会の相談ごとをすませました。仲子夫人は秘書官邸にゆかれましたので、中食は御夫妻と私の三人でした。食後すぐ夫人は食堂のとなりの居間にゆかれまして、食卓では首相と私だけが、食後の果物をたべてをりました。

「^お大先生、代議士の方々は、銀座のサロン春にゆかれて、とても面白かったとお話を聞きました。交詢社の地下にありますサロン春は銀座でも一流のカフェーで、裾模様の女給が二十五人もをります。去年のクリスマスにゆきましたとき、私にミニヨンダラーを飲ませてくれました、女の私にもチャホヤ相手になってくれます。美人たちにも女でもみとれてしまいますから、男の人なら毎晩でもゆきたくおなりだと思えます」などと、のんきなお話を致しますと、「フーン塩原さんも行ったとは、なかなか隅にをけないネ、わしも一度行ってみたいな」とおだやかなお顔で、気らくに申されましたが、お眼は遠くを見つめられて、深く何かを考へてをられるように、お見うけしました。私はカフェーの話など、のんきなことを申上げたのが、はづかしくなりました。それで早く辞去しなくてはいけないと思いましたが、なぜか席をはなれがたく、しばらく黙ってをりました。「あの…」と云って、お顔を見ますと「うむ」と云はれました。お眼が、何んでも云っていいんだよ、と慈愛深く私をごらんになつてをられました。

「あの…政治って、大きくて深くて、むづかしくてわかりません。政治といふことは」。

「うむ…政治…むづかしいな…貧乏人をなくすことだ」。

おだやかなお声の中に、ピンと張った力が込められてをられると思いました。

「貧乏人をなくすことだ」。

自分の胸に一字一字を彫りつけるようにくり返しました。木堂先生は婦人参政権を実現して下さい、沢山の貧乏人も救って下さる政治をなさる大切なお方なのだ。どうぞ長生して下さいようにと祈る気持でありました。⁽¹⁵⁾

四月二十四日(日)春雨の中を公邸にゆきまして、首相御夫妻外相夫人と共にお食事を致しました。そして午後二時より官邸会議室で、経済学博士太田正孝代議士(大蔵参与官)が清和会のために講演をして下さいました。四十三名出席四時散会。そのあと日本間で常任幹事会がありました。六時にすみまして、私だけが残りまして、八時に首相夫人と若夫人三人で夜食をしました。食堂に、首相がお茶をのみにこられました。米国より送られてきました大きなサンキストを二つに切って、芯をぬき、念入りにナイフを入れてから、そこへ粉砂糖をたっぷりかけられました。

「塩原さんと、仲子にサンキストを作ったから、食後にたべなさい」と申されて、私はびっくりして「恐れ入ります」と頭をさげました。米国の果物サンキストのよい香りも、初めてのことであり、とてもおいしゅうございました。

政界では、つむじ曲りと云はれます。犬養首相も、嫁の仲子夫人と私に、念入りに食後の果物を作して下さいます好々爺であられます。

四月二十七日(水)、清和会の相談ごとで朝九時半に公邸にゆきまして、夫人と要談をすませました。中食は相変らず御夫妻と御一緒でした。仲子夫人道子サン康彦ちゃんとお供二人と御一緒に、自動車で靖国神社にゆきました。特別参拝券で北側入口より参入、奥殿で特別参拝をさせていただきました。

学校の帰途、袴姿で公邸にゆき、首相夫人の居間に入りますと、「明後日の会には、政務官の奥様たちが全部出席なんですから、ぜひ塩原さんがきて下さらないと、お顔と名前が私たちにはよくわからないで、困るんです。ぜひきて下さいネ」。

砂田夫人に云はれました。

「農林大臣の奥様が貴女にぜひきてほしいって、わざわざ次官の砂田の奥様が、お使いにこられたんですよ」。

首相夫人は大袈裟な表情をされました。

「正式の御招待も受けてをりませんし、そのことでしたら、二、三日前にも山本夫人に、こちらでお目にかかりました時にも、お断りしてありますから」。

素ッ気ない私の言葉に、お二人は顔を見合はせて苦笑されていました。私はお春さんがはこんできましたお茶をのみ、お菓子を食べてをりました。

「塩原さんも、書生サンで困った人ネ。なにも正式に招待状を出さないからって、貴女は内輪の人じゃないの。貴女がどこかへ講演に行くとかで、お断りしたのは知っていますですが、農林官邸で奥様ばかりの招待会に、貴女が出席しないってこと、ないじゃありませんか、その講演は断はれるんでしょう」。

「その講演の日を替へて招待会にきて下さいネ、私だって大臣の奥様からのお使いにきたんですから。私の立場も……」。農相夫人の招待会を、さほど光栄にも思っていない私には、首相夫人や農林次官夫人の言葉が、気に入らなかったので、むすっとしてゐましたところへ、首相が入ってこられました。紅茶や果物を御一緒にいただく間にも、首相夫人は農相夫人の好意を無にするように悪いからと、しきりに私の出席をすすめられました。

「どうおっしやられても、失礼させていただきます。私が話にゆくことは、半月も前の約束ですから、今さらお断り出来ません」。

「貴女はほんとに頑固な人ネ」と首相夫人は厭な顔をされました。

「塩原さんは、どこへ話にゆくのかネ」。

首相がおだやかに訊かれました。

「森夫人におたのまれましたので」。

「森は？ 誰かネ」と問はれました。森と云へばすぐ内閣書記官長の森恪氏と思はれるほどでしたが、「森ノブテル（轟昶）さんです」、「そうか：ノブテルか」と首相はうなづかれましたまま、果物を召し上がってをられました。しばらくして、「政友会に三百名あまりの代議士はをっても、産業立国の政策を身を以って実行する者は、森ノブテル一人だ。そのために代議士を辞任したのだから」と、首相は私に聞かせるように申されました。森ノブテル氏とは、そんなに偉いお方なのかと、私はそのときはじめて知りました。

「勝浦小学校母の会で、私とお友だちがお話するだけでなく、興津の森サンの別荘に泊って、次の日にその森工場を見せて下さることになってをります」。

「うむ、そうか。それはいい。ぜひ森の工場をよく見せてもらってきなさい。しっかり見て話してほしい」。

私を見て、命じられるように申されました。

「ハイ、よく見学して御報告いたします」。

首相の炯眼を見上げました。

私の勝浦行は、個人的なことだけでなく、首相からの大事な見学でもありますことが、私にはとても嬉しくなりました。

せんでした。

我が世の春を誇り顔の夫人たちの相手役をさせられるにすぎない、農相官邸の招待会を断ってよかったときへ思ひました。

× × ×

病臥中の通信参与官坂井大輔氏（総裁元秘書）が重態といふことでした。

首相は、政務多忙中をわざわざ紀尾井町の坂井家にゆかれましたが、予定の時間を過ぎましても、帰邸なさいませんでした。

その頃は特に不穏の空気がただよってをり、「大養暗殺」の報が流布されてをりましたので、首相の身辺の警備はひそかに、きびしくされてゐましたことは、私も知ってをりました。それだけに、首相夫人の不安気な御様子には、私までおちつけませんでした。

「かれこれ一時間近くもお帰りがおそいのは、予定外にどこぞへおゆきになることでも出来たのかしら。聞かせておくれ」。

仲働のお春さんに云はれました。さっそく近藤秘書官がきまして、「予定外のことは何もございません。御帰邸の報告がないので、警視庁でも心配いたしましたして、方々へ問合せををると申します。報告がまいりしだい申し上げます」。

「いやな噂を聞くときですからネ」とつぶやかれた夫人は、おちつかなく立ち上がられると、となりの食堂にゆかれますので、私もついてゆきました。椅子にかけられるでもなく、無言で向き合って立ってをりました、そのとき、横門（日本間）に御帰邸の警笛が高く鳴りました。

紀尾井町の坂井氏を見舞はれた帰途、急に思いつかれて、四谷南町の私邸に立ちよられたといふことでした。

私邸の庭で愛玩のバラの花を眺められたり、二階の自室にゆかれなさいましたと、護衛の宮崎刑事が夫人に説明してをりました。

「なぜ、四谷へ行ったときすぐ、デンワをかけないのです。警視庁で大騒ぎしたんです」。

夫人に云はれて宮崎刑事は、ただもう恐縮するばかりでした。

夫人は突然私邸にゆかれたのは、何の御用かと、不審に思つてをられた御様子でした。首相は食堂でお茶を飲まれながら、「私邸の庭は、草でも取らせてきれいにしてをく方がよい」。

「そりゃ、草ぐらい取らせてをきますが、当分私邸にはお帰りにはならぬのでしょうけれど」。

夫人は留守中の私邸の庭を、特にきれいにする必要はなからうといふお顔をされました。

「いや……いつ帰つてもいいように、私邸はきれいにしてをくものだ」とつぶやかれました。

私には首相のお言葉が胸にしみ通るように印象深く忘れられませんでした。

食卓の上には私邸からお持ちかへりの、沢山の「香」が列べられました。

「どうしてまた、こんなに沢山のお香を、私邸からお持ちかへりになつたのです」。

夫人は厭な顔をされましたが、首相は黙つて「香」をあれこれ見てをられました。日頃から「香」を嗜まれます首相は、官邸に移られます時にも、いろいろ持つてこられました。私邸に立ちよられた用事は愛玩の「香」を取りに、わざわざゆかれたと思ひました。

「かみさんたちも、少しは「香」を嗜むがいい、皆にも分けてやる」と、ポツンと申されました。夫人たちのことを、いつも平気で「かみさんたち」と首相が云はれますのが、夫人にはそれが気になるらしく、そのときも「お口がわる

い」と苦笑されてをられました。

× × ×

愛玩の香合に納められましたお好みの香が、はからずも、五月十五日の夜、逝去されました首相の枕辺に供えられたのであります。

× × ×

五月九日（月）午後三時、首相公邸にはじめて母が参上いたしましたとき、応接室までわざわざ首相御夫妻と仲子若夫人がお出まし下さいました。やさしくお言葉をかけて下さいます、母は感謝して御挨拶を申し上げます。官邸の内部、お庭、公邸の室などを拝見させていただきました。

私にはこの日、お目にかかりましたのが、生前の犬養首相との最後となりました。この日が永久のお別れでありました。

9 五月十五日

その日は休日、母は外出、私は茶ノ間で女中相手に夕食をしていましたところ、森ノブテル夫人から電話で、「今、銀座ですが、犬養首相が撃たれた号外が出たと聞きました、早く調べて下さい」と云はれました。すぐ電話しても、鳩山邸はお話中だからということも、不安をつのらせました。ともかく急ぎ着替えをすませました六時すぎ、鳩山邸から電話で、「只今、奥様は首相官邸にゆかれ、塩原様にもすぐおゐで下さいと申されました」と執事の声でした。電車

通りまで駆けてゆき、円タクにのりました。溜池から坂を登ってゆきますと、剣付鉄砲の兵士たちが、ものものしく警戒で、自動車の列が坂をふさぎ、途中で車を降りました。

横門の鉄扉は閉ざされて、兵士がかためていました。人群れをかき分けて、やっと門に近づきましたが、入れてくれません。鉄扉の内も大勢の人たちでした。折りよく扉のそばを健氏秘書の土屋君が通りかかりましたので、「土屋さん」と大声でよびました。

「早くお入りなさい」。

「でも入れてくれないんです」。

「この方は首相夫人の秘書ですから、早く入れて下さい」。

土屋君が兵士たちに云いましたので、門扉が細目に開きました。

玄関から日本間の入口にある、黒塗りの杉戸のところ、鳩山夫人と太田正孝代議士が立ってをられました。

「早くお居間に行って、私はここに」と鳩山夫人は口早に云はれました。

夢中で畳廊下を首相の居間に飛び込みました。五、六人の医師たちが枕辺をとりまき、看護婦の姿も目に入りました。千代子夫人は寝台脇の椅子にかけられて、首相を見守ってをられました。顔面包帯の首相の枕辺に、女中頭のおテルさんが、首相の右頬の上に小さな水袋をあてがってみました。寝台の裾の方に、砂田夫人が膝まづいて、お布団の中の足をさすってをられました。

横あいから、ゴム袋の湯タンポが私に渡されましたので、お布団の中へソツとお入れたとき、首相は沓下を履かれました。右足は冷え切ってをられました。

首相は左を下に、目を閉じられたお顔を、こちらに向けてをられました。苦痛は訴へられませんが、ときどき「水」

とかすかに云はれるだけであります。おテルさんは、口中にたまる血をガーゼで拭き取っては、洗面器に入れてゐましたが、私にたまったガーゼを捨てて下さいと云はれました。

血染のガーゼが沢山入ってゐます洗面器を持って室を出て、畳廊下を曲りますと、ハッとして立ちどまりました。

一間幅の畳廊下の左右にズラリと、不安気な顔に、眼を異様に光らせた夫人たちが、血染のガーゼを見ますと、アーと呼び立ち上がって私をとりまき、口々に首相の容態を聞きます。が私は無言で首を左右に振るだけでした。空の洗面器を持って、居間に戻りましたが、少しづつでも、血染のガーゼはたまりません。おテルさんからまた捨てて下さいと、洗面器を渡されましたが、夫人たちに見せたくありませんでした。そこで庭に面した次室の障子をあけて廊下の隅にありました大きなアケビの屑入れに、新聞紙を厚く敷き血染のガーゼを捨てることにしました。

畳廊下の夫人たちには、「水をこまかにくだいて、一寸丸ほどの氷袋を沢山作って下さい」とたのみました。持つてこられる氷袋は水が大きかったり、袋の口の紐が長く下っていたり、氷は細々と砕かれてゐても、袋の口があまってブラブラするなど、さまざまで病室にはこびますと、芳沢夫人は「これじゃ役に立たない」と苛立たれました。

「酸素吸入も、アルコールも不足してきたから、早く四谷の灰吹屋に電話して」と云はれましても、電話は官邸の方で全部してをりまして、どうにもなりませんでした。そこで私が灰吹屋にゆくことになり、注文の品書を持って廊下をられた太田正孝夫人と通用門を出ました。

そこにズラリと列んでいました自動車に、「薬屋に急ぎの用ですから、どなたか車を使はせて下さい」。大きな声を出しますと、目前の新車がすぐ乗せてくれました。

戒厳令のしかれた帝都の夜景は何か不気味に思はれました。⁽¹⁶⁾

氷袋のことで、病室と畳廊下を往復してゐましたとき、森ノブテル夫人から、「総理の奥様はあるとき、官邸のどこ

にをられましたの、よくお怪我をなさらなかった」。

「あのときは、帝国ホテルに四時の結婚披露宴に出席されてをられました」。

「官邸にをられなくてよかったですネ。あのとき総理の護衛はどうしてゐたのです」。

「宮崎さんは、風呂から出たばかりで、ピストルは机の引出しに入れてあって、役に立たなかったと云ひます。休日
で秘書官は一人も居なくて、仲子若夫と三人の女中さんだけでした」。

私は森夫人と話合つたことを、太田夫人に車の中で話しました。

四谷見附の灰吹屋にきますと、官邸に何度行つても入れてくれず、無駄をしてゐましたと、番頭が言いわけをしまし
た。入用品を車に入れさせる間に、灰吹屋から自宅に電話しますと、母が出て「どんな御様子だい」とオロオロ声でし
た。何んにも云えませんので、「夜中になりますから、寝て下さい」とだけで切りました。

どなたのお車を拝借したのか、聞くことも忘れてしまい、急ぎ官邸に戻りました。

次室に入りますと、健氏が私に「この薬をつぶして下さい」と金色の小粒の入つたコップを渡されました。仲子若夫
人とスプーンで小粒を押しませんが、固い小粒は水の中を動きまわるばかりでした。この小粒は支那の気付薬とかで、こ
れをとかした水を首相がお飲みになれば、少しは気力もおつきになると聞きますと、一生懸命でした。小粒も少しつづ
れて、水がうす茶色になりましたのを、健氏が吸呑に入れて、病室にゆかれますのに、私もついてゆきました。その吸
呑の水を少し飲まれたとき、首相はむせて血を少し吐かれました。

「これはいけない」と医師の一人に云はれましたので、ハッとしました。仲子若夫人と一生懸命にとかした支那の薬
の水が、かへって悪かつたように不安になりました。それから首相は吐気がつき、安静でありましたが、少しづつ悪
い方になりますようで、心配でなりませんでした。

十五名の名医の方々が枕頭につめてをられました。別室で時々協議されては、また首相を見守られておりました。弾丸は、顎から頭に入つてゐるとか、右膝も撃たれてをられたようでした。

「今夜中は保つ」といふ小声も聞かれました。また協議をされたあとに、「弾丸摘出の手術がうまくゆけば」「体力的にどうか？」などと、ささやかれます医師たちの声も聞こえましたが、十五名の医師たちが互にドイツ語で話合はれるのが、何か不安でなりませんでした。

千代子夫人の軽い目まいに気がつきました私は、ブドウ酒をお飲ませしてから、お居間におつれました。十一時近くでした。

次室にをられた仲子若夫人が、「塩原さん、私のところへ行つて、道子と康彦をつれてきて下さい。」ハツとして、仲子若夫人とお互の眼を見詰め合ひ私はうなづきました。

通用門を出ますと、ドツと新聞記者たちにとりまかれました。口々に容態を聞かれましたが「おちついてをられませ」とくり返しなが、人々を分けて、向側の秘書官邸の玄関に飛び込みました。女中二人をせきたてて、寝室からつれ出した康彦チャンはまだ眠ったまま女中の背中に、私は道子サンの手をしっかりと握つて、通用門を入ろうとしますと、記者たちが「お孫さんをつれてゆくのは淋しいからです」と云いながら、とりまいて放してくれないのを、かき

「ちがいます。お孫さんだけ放つてをくのは淋しいからです」と云いながら、とりまいて放してくれないのを、かき分けるようにして、玄関に入り、病室の次におつれました。

夜更けて冷んやりしてききましたので、道子サンの羽織と足袋をとりよせました。

「ね、おちいさまは大丈夫なの」。

膝と膝をつき合せて、私の両手をしっかりと握つて、道子サンは円まらな眼を据えて聞かれます。

「ええ、大丈夫です」と力を込めて私が云ひましても、すぐまた聞かれ、三分おきぐらいに、同じ言葉をくり返します。「大丈夫?」「ええ大丈夫」と互にくり返してゐます中に、私は段々と不安になってきまして、病室のぞはめきが気になりましたとき、仲子若夫人がお二人を急ぎ呼びにこられましたので、私も一緒に病室に入りました。

首相の枕辺に、ぐるりと各大臣が立列んでをられます中で、首相に近く鳩山文相の姿が目に入りました。私は寝台の裾に座って、目を閉じられたままの首相のお顔をお見上げしました。一言の苦痛も申されず、静かな御臨終でございました。

昭和七年五月十五日午後十一時二十六分。

「人は自らの死に所を悟らねばならぬ」といつの時でありましたか、犬養首相が申されましたお言葉を思い出しながら、私は涙の合掌をいたしました。

× × ×

「おかあ様をおひとりにははいけないわ。誰かおそばにおつきしてゐて下さい」と仲子夫人はそう云って、私と顔を見合せました。

「お氣をつけた方がおよろしいわ」と小声で私が云ひますと、仲子夫人は深くうなづいて、台所の方へゆかれました。大きな衝撃の渦の中に投げ込まれたような千代子夫人の御心情を思いますと、ソッと独りにおさせしてあげたい、声を出して泣くことさへ、がまんされてをられる、おつらい立場がお氣の毒でなりませんでした。

けれども「千代子夫人が、若しや殉死でも」といふ疑念を、近親の方々が持たれるほど、夫人のただならぬ御様子でもありました。

「しばらく、独りで居たい」と云はれましても、心配されるお身内の誰方がお付きしました。それからしばらくして、「自殺はしません。髪を切って下さい」とおっしゃいましたとか。そして数珠を手にした、千代子未亡人は切り下げ髪の喪服姿になられまして、静かに畳廊下を、御遺骸の安置されてあります十五帖の首相のお居間にゆかれました。

10 十五日以後

昭和七年五月十六日午前二時すぎ、首相公邸を若宮貞夫人と共に辞去しました。

真夜中の街は、さぞうす暗いもののように思つてをりました私は、街燈のあかるさにおどろきながら車で帰宅いたしました。

張りつめていましたものが、くづれていくような、力のぬけたくたくな、どうにもならない心身の疲労は私をよく眠らせなかったのです。朝八時半には、母と私は半喪服（無地の着物に黒の帯）で、公邸に弔問いたしました。そして清和会の幹事諸姉を召集、弔問の夫人たちの接待をしてもらいました。御遺骸の安置されてをりますお居間に、千代子未亡人芳沢夫人と三人でをりますところへ、「荒木、大角の奥様がぜひ御焼香させていただきます」と申されますが」と取次いできました。⁽¹⁷⁾

未亡人はサアと顔色を変へられて、「私は会いません。塩原さんあなたが」と席を立たれました。

「陸海軍が殺してをきながら、よくも悔くやみにこられたものネ、顔みるのも厭ですよ」。

芳沢夫人はきびしい顔をされて、未亡人のお手を引いて出てゆかれました。

「あの、どういたしましたしょうか」と取次の人はオロオロしていました。

「こちらへお通しして下さい。」

私はおだやかに云ひましたが、重苦しい気持でした。喪服姿の荒木大角の両夫人は、しとやかに入ってこられました。そして、「荒木でございます」「大角でございます」。

両手を揃へて深く頭を下げられました。

「あの、奥様はおつかれでございまして、失礼いたしてをります」と私も両手をつきました。

「それはもう、どのようにか、申し上げようもございません。謹んでお悔み申し上げます」。

小声ながら、はっきりと云はれました。両夫人はしばらく合掌されてから、お焼香をなさいました。次ぎ次ぎとこられます弔問者の応接で、私はほとんどお居間を出られませんでした。木堂先生の御遺骸のおそばに、長く居られます御縁の深さを喜びました。

夕方やっと帰宅して、入浴後一眠りしました。喪服に改めまして、公邸にゆきました。五十名ほどの清和会会員と、御納棺に参列いたしました。白いカーネーションを一輪、包帯のままの故犬養首相のお顔の近くにお入れて合掌のまゝ嗚咽しました。

五月十七日は午後三時に公邸にゆきました。天皇陛下より御下賜のお料理を、清和会会員に一口つつ差上げました。夜十二時すぎ、秦豊助夫人と辞去いたしました。

五月十八日は、首相官邸最後のお通夜でありました。夜七時十五分からラジオで古島一雄氏が「故犬養毅首相の話」を放送されました。各宮家、徳川家達公等々よりお供物の菓子や、清和会会員に分けました。

五月十九日は首相官邸に於きまして、政友会の党葬でありました。式場の大ホールには、故犬養毅首相のお棺ひつぎ、白木の位牌には、「台光院殿沈毅木堂居士」の御戒名。礼装の写真が安置されました。⁽¹⁸⁾

聖上、皇后、皇太后、各宮家の榊、供物と各氏よりの幾百個の生花、花輪が列らび、臣民としては最高最大の天台宗に依る葬儀は、勅使の御代香、各宮家の御代香、高橋是清首相以下各大臣朝野の各士の焼香、清和会を代表して私の他六名が特に参列を許されました。ホールの外は廊下玄関広場、庭に至るまで花輪で埋まり、一般の告別式は四時半までかかりました。二時間ほどは日本間で、御遺族の方々と休息いたしました。

出棺は五時になりました。鳩山家の車に、鳩山星島植原鈴木の各夫人と私が乗り、霊柩車より九番目でありました。⁽¹⁹⁾落合の火葬場にゆきます沿道は、人垣で埋まり国民葬のようでありました。

五月二十一日、広い芝生に木立に、五月の陽光がみどりと輝き、思い出多い首相官邸の庭ともお別れの日でありました。

公邸の日本間で初七日の法要をすませました諸夫人たちは、喪服に襟がけの甲斐甲斐しさで、四谷の私邸に引移る荷作りに立ち働かれました。

半年前、私邸を出て首相公邸に移られるときは、二、三年は犬養内閣はつづくものと、思ってたであらましよう千代子夫人の胸中を想いますと、働きながらお互に泪ぐんでをりました。夕方までには無事に引移られました。四谷の犬養邸の千代子夫人の居間に安置されました御遺骨をお見上げして、私は悲しくそして口惜しく泪ぐみました。

あわただしくすぎました公邸の一週間を、仲子夫人や多田夫人と語り合ひ、五月雨の夜を九時に辞去しました。

六月三日(金) 斉藤実内閣に、文相として鳩山一郎氏が留任されました。

午後二時犬養邸のお佛間には、鳩山秦山口田子の諸夫人と私も同席。⁽²⁰⁾仲子夫人より、「母、犬養会長ははまだ引退しません、七七忌(四十九日)が明けましてから、清和会の今後については、すべてを仕末して、立派に引退したい希望です」と云はれました。特に私に対しては、「葬儀の日に、清和会を解散する云々につきまして、犬養会長が、塩原

常任幹事に申したことは取乱しての一時的の感情であったと、私は母の心持を察してありますので、おわびを致します」と挨拶されました。神経痛で臥床中の会長の枕辺に、皆様と共に御挨拶にゆきました。

常任幹事会は、六月例会は会長喪中に付、休会することにきまりました。

六月十五日。故犬養首相が一ヶ月前の十五日午後五時三十分、凶弾をうけられた同時刻に、犬養家で法要をされましたので参列。

六月十八日の五七日忌。七月二日の七七七日忌（四十九日）の法要にも参列しました。

七月六日午後九時四十五分発の汽車で、故犬養首相の御分骨を健氏が奉持されて、郷里岡山に出発されますのを、東京駅に鳩山夫人その他大勢の人々と共にお見送り致しました。

七月十三日午後四時、犬養邸にゆきますと、佛間の天井に釣られた新盆の岐阜提灯二十三個に豆電気がともされ、九ツの切子燈籠、十七個の大内燈籠と、そして生花の供華が飾られました、まことに賑やかな新盆でありました。七月十五日夕五時、犬養邸の新盆の法要には、鳩山、秦、山本、砂田、星島、岡田、若宮の諸夫人その他と同席でありました。

八月二十二日午後二時、上野寛永寺、寺中の津梁院で故犬養首相の百ヶ日忌の法要には、水野、山本、高山、植原、砂田、鳩山、秋田、安藤、古島、板野、山下の諸夫人と同席いたしました。⁽²¹⁾

政友会総裁鈴木喜三郎氏に、鳩山夫人は「私の友だちで、清和会の心棒です」と私を紹介なさいました。法要後、私は秋田夫人の車で青山の墓地にゆきました。

凶殺された井上、浜口、両家の墓所に近く、犬養家の新しい墓地には、伊豆小松石の美事な墓石に「犬養毅」、その裏には「備中庭瀬の人」とだけが彫られてありました。

簡素な木堂先生の御人柄にふさわしいお墓だと、お見上げしている中に、涙が流れそうになりました。

御影石で燈籠形の「名刺受」を、清和会として墓所の片隅に供へたのであります。

私は墓前去りがたく、犬養先生、この偉大な婦人に対する良き理解者を喪つては、婦人の参政権を得べき日本婦人は、当分政治的進出は不可能であることを思ひ、全日本婦人解放の為に深く悲しんだのであります。

人物三面鏡（二）

塩原 紫江

犬養千代子刀自

昭和八年五月十五日（月）上野寛永寺で政友会と犬養家合同の一周忌法要が営まれました。斉藤実首相以下各大臣、貴衆両院議員、各地方より上京の木堂会と、清和会会員三十余名等、本堂に入りきれぬほど二千余名の参列者で、午後一時半より四時までかかり、法要後、青山墓地へ松野秦両夫人と同車して、墓前祭に参列いたしました。

清和会は五月四日に、一周忌のお供物として、未亡人宅に茶器三十人分をお届けしました。六月三日、麻布笄町四に新築されました未亡人宅に、そのお祝品として清和会は、「友禅振袖姿の人形・ケース付」をお贈り致しました。人形の代金は四十一円でした。

十二月三日、未亡人は盲腸炎手術のため、京橋の南胃腸病院：三階十五号室：に入院されました。周囲の人々は御老体で手術をなさることを心配されましたが、「年を考へて止めてくれるが、一度決心した事は自分で責任を持ちさへすれば、実行した方がよいといふ日頃の考へで」と云はれ、大手術をなさいました。結果は良好で、清和会はお見舞とし

て、電気スタンドを差上げました。

「塩原さんに電話かけて、あの人が気をもむから…」と未亡人がうわ言を申されたと、若夫人より聞かされました。度々お見舞に行つてをりましたが、二十一日は無事退院されました。

十二月二十五日、琵琶新曲「犬養毅」が、初放送されました。

昭和九年二月二十一日、熱海の別荘にをられます未亡人に、二ヶ月ぶりでお目にかかりました。そして二十四日には一休庵の普茶料理を未亡人と、若宮貞夫御夫妻と共に会食いたしました。私は一週間ほどで帰宅しました。三月一日に日本橋宝町の小田原屋から、甘酒の樽を熱海の未亡人宛に送らせました。

三月十六日熱海より帰京されました未亡人を、健氏夫妻、芳沢、秦、山田、猪野毛の諸夫人と共に、東京駅に出迎へました。

九年五月十五日、寛永寺で三回忌の法要には、斎藤実首相以下各大臣、政友会総裁鈴木喜三郎氏各代議士、清和会の諸夫人等が参列されました。清和会は五月十一日に未亡人宅の御佛前に「香木」黒塗蒔絵箱入りをお供えいたしました。金二十円でありました。

× × ×

清和会は創立の六年と七年の二ヶ年の記録と写真等をまとめた、会報を八年正月に会員に配布しましたところ、好評でありました。それで第二号（九年）には「このごろ」と題して、お佛壇の前で数珠を手にされた、犬養名誉会長のお写真をのせて、御近況を記しました。（記事抜粋）

入梅時の曇ったむし暑い日の午後、麻布笄町の御隠宅にお訪ね申し上げました。

お佛間のお床には故犬養先生の御筆になる「仏心」の横掛、お仏壇の銀製の花器には、遺愛のバラの花、本会よりお供へ申した「香木」が飾られ、果物お菓子など心を込められたお供物でした。お仏間の次のお居間で、

『今頃は六時に床を出て枕元の手まはりの品は自分で片づけます。お花の水を取り換へてお仏壇のお掃除をして、少しの間、読経します。朝のこの仕事が一日中で心楽しい時です。朝はパンであとは二食共御飯です。まあ軽なお魚や野菜類が多いですネ。青山の墓所には一日をきにゆきます。いつも思ふ事ですが、手術をしても毎日元気で暮らせるのは、仏が守って下さるので、感謝しています。それに皆様がさぞ隠居になって淋しかろうと、代るがはるに遠方にも係らず、お訪ね下さるので、淋しい思ひを一日もせず、隠居の家のように云はれる程に、お客様で毎日を通しています。これも仏の生前の徳のおかげと有難いことに思っています。』

こんな隠居の身で今さら気を張って、何を習ふといふ事もしたくありません。お寺詣りも結構だと思ひますが、仏の遺されたいろいろの物を、時々手入れしたりするだけでも、かなり時間がいります。それに私は、老人のくせに生意気なのですが、生きてをる間は矢張り、時世におくれる老人でも、出来るだけ若い人達から世の中の事を聞かせて貰って、死ぬまで世の中の勉強はして行きたいと思っています。そんな心持なもので、御老人仲間にも入らず、まだ眼も悪くないので、夜は仏の遺されたいろいろの本や、皆様から送られる雑誌などを読んでいます。自分の半襟なども自分で掛けるのですよ。嘘のようでしょうが、仏が生前自分の事はなるべく自分でなされたので、私も昔から自分で出来る事はなるべく次の者の手を借りずに行っています。

私も今年は古稀ですが、別に祝ひはしません。私も七十といふ事を忘れて気ばかりは、若い人と同じように、いろいろ知りたい欲を持ちます。清和会も毎月出席することは、矢張り年のせい以前のように出来ませんが、いくら隠居しても会のことには気になります。お互に死ぬまでは、修養しなければならぬのですから、清和会をそのために、有益

に利用して下さって、皆様のお力でどうかして、清和会を段々と盛んに大きなものにしていただきたいといふ事ばかり考へます。私の皆様へのお願ひはいつもそれなのです。

清和会から去年此の家の新築祝ひに下さった可愛いらしいお人形。清ちゃんといふ名前でしたネ。夏の着物を新調して着せましたよ。塩原さん見て下さい。私も十三人の孫と、七人の曾孫があります。老人の生活は変化がなくて、お話するほどの事ありません。いつも此の老人を皆様が心配して下さい、ありがたいと思ひます』。

このお話のあとで、私に千代子刀自は、生形見として「私が総理夫人として、はじめてのお正月に締めた目出度い丸帯です。貴女にはまだ地味ですが、年をとられたら締めて下さい」と、金通し松の織物の丸帯を下さいました。

七月十一日、未亡人に付き添って、鉄相内田信也、農相山崎達之輔、通相床次竹二郎、鈴木梅四郎の諸氏を訪問なさいました。

八月二十三日、軽井沢の離山山麓はなれの泉の里にある芳沢別荘の離れにをられる未亡人を訪問、中食後、鳩山別荘にもゆきました。芳沢別荘に泊り、未亡人のお相手をしました。

九月十八日、上野府立美術館の朝倉塾展に出品されました。故犬養首相の約一丈ほどの銅像を、製作者の朝倉文夫先生の御説明で、未亡人、芳沢、多田、鷹居、中村の御身内の方々と拝見いたしました。この銅像は、岡山県吉備郡高松町、吉備津の吉備津神社の境内に建立されました。

十年四月十一日、母と共に熱海の犬養別荘にゆき一泊いたしました。

十一年二月十七日、熱海の犬養別荘にゆきまして、ゆっくりと一週間未亡人と共に生活いたしました。寝室も、入浴も、散歩も食事も一緒に、爺やさんがつき添ったり、たまには仲働のお春さんと三人で熱海ギンザにゆき、買物をしました。時折、夫人たちが日帰りで、二人三人と御きげん伺いに来てくれます。泊って下さる方がないのが未亡人にはお

淋しいらしく、夫人たちは、とても泊ってまではつとまらない、貴女はよく一週間もと、あきれてをられました。私は日頃から、羨のやかましい母と生活してをりますから、犬養未亡人のおそばにをりましても、けっして窮屈ではありませんでした。二十五日まで滞在して、夕方帰京しました。はからずも夜には雪となり、二・二六事件の朝を迎へました。三月二十四日、未亡人は熱海より三ヶ月ぶりで帰京され、健氏御夫妻と学習院初等科一年生の康彦君と共に東京駅に出迎へました。

十二年八月十五日、鳩山夫人と共に新宿発夜十時四十五分発の二等寝台車に乗車、十六日朝六時半松本駅着、下浅間温泉、西石川旅館に入り、入浴して朝食後、同旅館に滞在中の植原悦二郎氏をお見舞しました。鳩山夫人は軽井沢の別荘へ。私は正午すぎには富士見駅に着き、出迎へ下さった小川昇氏の案内で、犬養家の別荘（白林荘）にをられる、未亡人に久々でお目にかかりました。一万二千坪の松林の丘をしめる白林荘は、富士山と八ヶ岳を一望する涼しい松風の佳景の地で、中食を御一緒しました。新宿駅も松本駅も、出征兵士の見送りが盛んなことなどをお話しました。その日の中に小海線川上村の避暑地にゆきました。

十三年一月五日、年始の挨拶に四谷南町の犬養健邸にゆきました。旧邸を取りこはしてしまい、犬養内閣が組閣された記念の日本間も、思い出の影となり淋しい気持でした。新築洋風の各室を拝見しました。

二月二十七日、熱海汐見町の芳沢別荘に、犬養未亡人をおたづねしましたら、一週間ほど滞在するようにと、申されましたが、一泊で東京へ帰りました。

四月六日日比谷の植田（銀器店）にゆき、清和会より木堂先生の七回忌の記念に、お供えします銀製の盛り皿二枚を注文しました。

四月八日、私宅に犬養未亡人がはじめて御来訪下さいました。母や私と四方山話をなさいまして、午後一時半から四

時半まで、御きげんでありました。

五月十八日、上野浄名院に故犬養先生の御冥福を祈念して、地藏尊を建立した有志夫人たちを、未亡人は目黒の驪山荘にお招きになり、お手厚いお馳走をなさいました。

六月十五日、清和会は鶴見の総持寺に於いて、犬養先生の七回忌法要と、戦没将士の慰霊供養をいたしました。諸会員は無地の会服に黒の帯姿で、二百三十名が出席され、僧侶七十名の読経にて、まことに盛大な行事でありました。御佛前で役員のみ記念の写真をとりました。

十五年三月三十日、麻布の未亡人宅に、四谷の本宅から、南京の中央政府（主席汪精衛氏）国民政府誕生祝いの、お赤飯とお料理が届きました。私は未亡人と共にいただきました。そして赤飯その他を、重箱に詰めて下さいます、母にと申されましたのでいただきましたが、重いので車で持ち帰りました。

十月三十日、四谷の犬養邸にゆきましましたとき、道子サン（二十才）の手料理をお馳走になりました。そして、汪精衛先生と健氏とのさまざま写真を見せていただき、健氏の並々ならぬ陰の苦勞話を、仲子夫人からお聞きしました。

十六年六月三日、犬養千代子刀白の喜寿のお祝いとして、清和会より飾棚（柿の赤実）をお届けしました。（金百四十五円二十銭）

十七年四月八日、仲子夫人が前夜電話をかけこられて、相談したい事が出来たから、朝からぜひ来てほしいと申されました。

何事かと、四谷の犬養邸にゆきましましたところ、奥の室で仲子夫人から、「家宅捜査をうけたのでは、当分帰宅はむづかしいでしょう」と、健氏の身边につき、重大な話を聞きました。私は仲子夫人に、留守宅を守る心がまえなどについて、中食後も、道子サンと三人で三時まで話し合いました。

七月十九日、注文しておゐた、うなぎの蒲焼の折を持って、四谷の犬養邸にゆきました。それは四月四日以来、七月十日まで未決に入つてをられました健氏が、保釈出所されたので、慰問のうなぎをお届けしたのでした。

健氏は顔色もよく、肥られたようで安心いたしました。それに仲子夫人のお嬉しそうな御様子で、食事を共にして辞去しました。

三ヶ月ほどの間も、電話やまた四谷の邸へ出向いたりして、仲子夫人の相談相手にいくらかでもなれたと自分なりに満足でした。

十八年五月十五日、若宮、森の両夫人と共に青山墓地と、麻布の未亡人宅に行きました。

十九年五月十四日、十三回忌法要が、上野津梁院でありまして、鳩山夫人と共に参列いたしました。そのあと、南町の犬養邸で御供養の中食をいただきました。

戦時体制もきびしくなりまして、疎開の話など、お互の無事を念じあいました。

× × ×

戦後しばらくは、お互に自分たちの生活の建て直しに忙しくしてをりました。麻布の別宅が戦災で焼失しましたので、未亡人は四谷の本邸に移つてをられましたので、二十五年頃からは時をりお訪ねすることもありました。本宅の二階にをられました神父様の教導で、カトリック教の洗礼を、未亡人がうけられたといふ噂をききました。未亡人とお親しくしてをられた人たちは、信じられないと云ふことでした。昔のように簡単にお逢い出来ないのです。若宮夫人は「何度か、」と気分がおすぐれになりません」とか、「今日は御都合がおわるいので」とか、お断りをされたら、私に不満気に申されました。私も何度か行きましたが、若宮夫人と同じでした。未亡人のお気持からお断りになるのではなく、

仲子夫人が未亡人に逢はせなさらないのでと、云ふ人もありました。昔から親しい夫人たちも、私にしても、未亡人の晩年の御生活はよくわかりませんでした。昔から感情的になりやすいお方でありましたし、好き嫌いも強く、せっかく来訪された方に、お断りしなければならぬ、間に立った私などつらい思いをしたこともありました。晩年、昔の人たちに対して未亡人の面会謝絶は、御本人のお気持であったと思います。

二十七年八月二十五日、八十六才で犬養千代子刀自は、永眠されました。四谷見附のイグナチオ教会のお葬儀に、参列された夫人たちは、悲しむよりは、犬養未亡人の葬儀らしくない、何かちぐはぐな感じで、お互に変な気持でありました。

二十九年五月十五日午後二時、寛永寺に於て故犬養毅先生の二十三回忌の法要を営むといふ通知をうけました。

二十三年前の五・一五事件は、日本敗戦の序曲であり、政党政治の最後でもありました。日本歴史に急劇な変革が行はれました。単純に迎へる二十三回忌ではないと思われました。不気味な底流を度外視すれば、昭和七年から十二年の日支事変^{ぼつ}発までは、日本帝国の最後の繁栄と云ひますか、大衆にはまことにのんきな時代、散る前の花の華麗さ、灯の消えなるとする前の輝き、表面は悦楽の時代でありました。十六年の大東亜戦争に突入してから十八年までは、虚報の戦勝を信じて大衆は戦時意識高揚の中に、力み返^りって、「欲しがりません勝までは」と涙ぐましい生活に耐へておりました。十九年二十年と劇しい空襲下に、生死のきびしさの中で、真底から苦勞させられました。

二十一年から二十三年までは、敗戦国の国民として占領に依る物心両面の重圧下に、大衆は苦勞を重ねましたが、再建の意欲は力強い底流となつてゐたと思います。

講和に依つて再建国家の希望の光りが一筋サツと流れてきて、それからは敗戦に依る濃い霧の空が薄らいでゆく気持で、物心ともに明るさを求めて生活してきました。けれども、二十八年からの不景氣風は、物価の上昇、金融引締と大

衆の生活苦はきびしいものでした。犬養家にとってもずいぶん変化に富んだ、二十三年間であり、歴史の中にあまりに
も、むき出しにされてきたような、健氏の存在でもありません。最近では法務大臣を辞任されたばかりで、木堂居士二十
三回忌法要にあたり、代議士の肩書だけであることの方が、御尊父木堂先生はお喜びになると申したら、健氏に対して
皮肉でありましようか。

× × ×

雨上りの寺内は青葉の色もあざやかで、奥の控室の床脇には、遺愛のバラと白カーネーションの花瓶の間に、私服姿
の木堂先生の遺影が飾られてありました。青葉が陽をさへぎって広々とした室はヒンヤリとしてをり、松野鶴平、砂田
重政、武藤七郎の三氏だけをられました。すぐ近くの繁みから小寿鶏の鋭い声が深閑とした寺内にひびいてをりました。
そこへ安藤正純國務大臣、久原房之助、内田信也、植原悦二郎、宮島清次郎の諸氏と、三土忠造未亡人、若宮貞夫未
亡人、橋本龍伍夫人、その他の人々が参集されました。そして健氏夫妻に令息康彦君が、新妻をつれてこられました、
「家内です」と紹介されました。

本堂には、総理大臣としての大礼服の犬養毅先生の大きなお写真が飾られ、供華が左右に沢山飾られてをりました。
左右五人の僧侶は、緋色の袈裟を揃えて、導師を内に散華しつつ天台宗の経文を唱和しながら、ゆっくりとまわられま
した。

自由党総裁吉田茂氏につづいて、鳩山一郎氏が供華されました。安藤、内田の両氏は、衆議院の本会議で国警法案が
採決になるといふことで、控室から辞去されてをり、参議院議員の人々がをりました。

遺影の前に三人づつ列んで焼香を済ませました。健氏は低い聞きとれにくい声で挨拶をされました。控室には戻ら

ず、玄閑脇で小さな折箱をうけ取りましたとき、「塩原さま」と声をかけたのは、石巻から上京したお浅さんでした。五・一五事件のとき官邸に居ました女中のお春さんとお浅さんが、喪服姿でなつかしそうに私のそばにきました。「さすが犬養家の女中達は、しつかり者ばかりだ」と、軍法会議に参考人として呼ばれたとき、おテルお春お浅の三人とも、立派な態度であったと噂に上った人たちでした。

翻刻者註

- (1) 婦選獲得同盟については、市川房枝監修・児玉勝子『婦人参政権運動小史』、ドメス出版、一九八一年参照。
- (2) 塩原静編集・発行『清和会二十五年誌』、一九五五年、および、『清和会三十五年誌 せい和』、一九六七年によれば、各夫人名前は以下と推定される。中橋悦子、水野満寿子、床次恭子、勝田いよ子、山本米子、三土夏子、久原清子、川村文字。なお、鳩山夫人は鳩山薫である。本稿では、主に同書に基づいて夫人の名前を推定している。
- (3) 『清和会三十五年誌 せい和』、四三頁には、以下のように記述されている。執筆者はおそらく塩原であろう。「大きな菓子折を持ってきれいな着物をきて、あちこち訪問するのは無駄だ、そのための清和会だから一ヶ月に一度、会で逢ひあとは電話で用はたり」と犬養毅総裁は云はれた。虚礼廃止の実行は、清和会創立の趣意でもあった。正会員の方々はできるだけお互の家庭訪問はされなかつたようであった。三十五年の間には良き習慣にもなつたかと思ふが」
- (4) 楠瀬日年宛昭和六年十二月三十一日付書簡において、犬養は、無私庵創設への協力を約している。鷲尾義直編『犬養木堂書簡集』、岡山県郷土文化財団、一九九二年、五七四〜五七五頁参照（原著は昭和十五年刊行）。
- (5) 推定しうる各夫人の名前は以下である。秦静子、安藤歌子、砂田清子、岡田静子、植原彰子、秋田勝子、坂井英子。
- (6) 犬養木堂記念館編『年代順にみる犬養木堂の書』、岡山県郷土文化財団、二〇一〇年、六頁には、「…玉簪石生輝珠蔵川自媚…」との書が収録されている。廣常人世岡山大学名誉教授によれば、訓読は、「玉簪マレテ石輝ヲ生ジ 珠蔵サレテ川自カラ媚シ」であり、「晋の陸機の「文賦」に「石韞レ玉ヲ而山輝、水懷レ珠ヲ而川媚」とあるのに基づく」文言である（『同』、三二〜三三頁）。文中の色紙は、「玉蘊ミテ山輝キヲ生ジ 珠蔵サレテ水以テ媚シ」と訓じると推定する。「試程墨」は、程君房の墨を用いた、という意味であろうか。

(7) 星島夫人は雛子。

(8) 松本重敏は、天皇主権説の立場から美濃部達吉の天皇機関説を厳しく批判するとともに、「婦人の権利、婦人参政資格、選挙権の賦与を名譽ある義務と解し、国家の公務に参加することは、男子に劣らない選挙眼のある女子ならば認められてよいとする立場」に立っていた。そして、そのために重要なのは女子高等教育であるとし、「社会進出をめざす職業婦人として必要な女子教育の創設に打ち込んだ」のである。吉田善明「近代憲法の展開と駿台アカデミズム——松本重敏憲法学を中心として」明治大学大学史料委員会編『大学史紀要』第八号（二〇〇三年十二月）、一六一頁。なお、明治大学が昭和四年に、法律・経済の分野において、他大学に先んじて女性に門戸を開くにあたっては、松本と東京帝国大学の穂積重遠が「運営委員の中で中心的役割をはたし」たこと、同年十一月に松本が女子部部长に就任したことが、同論文一五七頁に指摘されている。

(9) 梅仙墨は、和歌山県田辺市の銘墨として名高く、犬養も愛用者の一人であった。

(10) この貴重な扇子の写真は、『年代順にみる犬養木堂の書』二七頁に収録されている。廣常人世名譽教授による訓読は、「本ヨリ塵土ノ氣無ク 自カラ水雲ノ郷ニ在リ、楚タトシテ 淨キヨト拭フガ如ク 亭亭トシテ妙香ヲ生ズ 是レ蓮華ヲ詠ズルノ詩ナリ 録シテ塩原女史ニ呈ス」である。教授は、「蓮は本来俗界にいるべき素質を持たないものであるから、おのずと水や雲の豊かな里に生まれた。咲く花は紅また白のあざやかな姿で、拭き清めたように美しく、すっきりと立ってすばらしい香りを放っている」と、詩の大意を解説されている。『同』、四六頁。

(11) 岡田夫人は福子。

(12) 喜多愛枝、松野たきの、猪野毛富子、若宮こと子、野田静子、鈴木阿虎、滝秀子、金光俊子、清瀬千代子、土倉君枝、本田繁子と推定する。

(13) 原稿には「堀切善次郎」と書いてあるが、犬養内閣に入閣したのは兄の善兵衛であるため本文のように修正している。

(14) 中島幸子、箸本静子と推定する。

(15) 晩年の犬養毅の経綸に関しては、時任英人倉敷芸術科学大学教授による明晰な解説がある。すなわち、第一次世界大戦を契機に国家総力戦の時代を自覚した犬養は、それゆえ軍事に傾斜するのではなく、まず経済に重点を置いて国力を高めるべきと判断し、そのためにも、近隣諸国との友好関係を重視した、ということである。『犬養木堂を語る会 犬養木堂とアジアの人々』、犬養木堂記念館、二〇〇六年、二八〜二九頁参照。

- (16) 当夜は厳戒状態ではあったが、戒厳令は適用されていない。
- (17) 荒木夫人は、荒木貞夫陸軍大臣夫人。大角夫人は、大角岑生海軍大臣夫人。
- (18) 犬養毅の党葬、ならびに犬養内閣全般については、『立憲政友会史第七卷 犬養総裁時代』、日本図書センター、一九九〇年
- (原著は一九三三年刊行) が簡便である。
- (19) 鈴木夫人は、鈴木喜三郎夫人カヅであろうか。ちなみに、カヅは鳩山一郎の姉である。
- (20) 山口愛子、田子静江と推定する。
- (21) 高山芳子、板野梅子、山下久良子と推定する。